

# 仏身論思想の展開

『大乘莊嚴經論』を中心に――

大正大学真言密教学博士課程 全 宗 釋 (東赫)

紀元二、三世紀に存在したといわれる竜樹の般若中観においては、色身と法身との二身説であったが、紀元四、五世紀に存在した無着、世親の瑜伽唯識説では、報身という仏身観が現われて二身説が三身説となり、そこに仏身論の重要な展開が見られるのである。

そこで本考では、初期唯識經典といわれている『大乘莊嚴經論』を中心として、竜樹・無着・世親へ展開される仏身論を考察して見ることにしたい。

## (一) 竜樹の二身説

竜樹は、彼の著『大智度論』に

「世間法不異世間、出世間法不異世間、世間法即是世間、出世間法即是世間」

「法身者不可得空。不可得法身者諸法因縁辺生。法無有自性」

「復次般若波羅蜜即是一切十方諸仏母、亦是諸仏師」

「仏法中有二諦。一者世諦、二者第一義諦、為世諦故説有衆生、為第一義諦故説衆生無所有」<sup>51)</sup>  
「復次仏有二種身。一者法身二者色身。法身是真仏、色身為世諦故有」として、世諦の為に有を説き、第一義諦の為に無を説き、しかもこの諸法有と法性無とは永く対立するのではなく、互に不難のものなることを説いて、常断の二辺に偏せざる中道実相こそ真実の境地であるという根本思想が、仏身論にも作用していることを見るのである。

いわば、竜樹が二身論を立てたことは、仏陀の正覚の内容である縁起の究竟のあり方としての勝義諦が、四聖諦なる世間的実用の教法として説定せられ、そしてその世俗諦なる教法によって、われわれ人間は勝義諦に入らしめられるという意味であったからであろう。

即ち、竜樹は般若波羅蜜多の空性勝義諦が世間的実用の世俗諦として展開し、それによって人類の救済が考えられていくという思想より、法身と色身という二身説を立てたのに外ならないと思うのである。<sup>52)</sup>

## (二) 瑜伽唯識派の三身説

この瑜伽唯識派は唯識説であって、われわれの具体的な能所対存の全ての存在は、心即ち識のみの内容であり、しかしその識は妄分別の根源であるから識を智へ転換すべきだという立場を取る。即ち、この思想は識の転換によって能所なる分別の世間の了得が知覚せられなくなり、未知覚であった空性勝義諦が知覚せられることになるという、いわば能所の有執に捉われていた有執的知覚(識)が有執に捉われない無執的知覚(智)へとその住地を転回するという転識得智をめざした思想であるが、『大乘莊嚴經論』はこの転識得智について、

「四智鏡不動、三智之所依。八七六五識、次第轉得故。」

「四智鏡不動三智之所依者。一切諸仏有四種智。一者鏡智、二者平等智、三者観智、四者作事智。彼鏡智以不動為相、恒為余三智之所依止。何以故。三智動故。八七六五識次第轉得故者。轉第八識得鏡智、轉第七識得平

等智、転第六識得観智、転前五識得作事智。是義応知」として、

煩惱・所知の二障の所依処である諸識を転じて、順次に大円鏡智・平等性智・妙觀察智・成所作智を得ると説いている。しかしこの論の梵文によれば、「大円鏡智は不動なり、三智はそれに依止す、平等性と妙觀察智と成所作智となり」また梵文の注釈文にも、「諸仏に四智あり。鏡智と平等性智と妙觀察智と成所作智となり。鏡智は不動なるも三智は動にしてそれに依止す。」と説くのみであって、諸仏の四智の名は提示されているが、未だ転識得智の意味は明瞭にされていない。この意味で『大乘莊嚴經論』は転識得智の思想が形成される過渡期的位置に立っているものといえよう。即ち、この転識得智の思想は「解深密経」→「瑜伽師地論」に発展し、さらに「仏地経」の四智説を引きついで『大乘莊嚴經論』へ展開され、『撰大乘論』にはほぼ確立され、ついに『成唯識論』に至って完成されたのである。

ここで、私らが忘れてはならないのは唯識教学におけるこの転識得智の可能性の問題であろう。即ち、迷いの世界から悟りの世界への転換の可能性の問題であるが、この点唯識教学は転識得智の可能の根拠として、依他起性という共同の場をその根拠に置いたことである。つまり、私らの日常経験の世界(遍計所執性の世界)より悟りの世界(円成実性の世界)への転換が可能なのは、この両世界が同一の場即ち、依他起性という共同の場において考えられているからである。いいかえれば、唯識教学は依他起性においての転捨(流転門)が遍計所執の世界であり、転得(還滅門)が円成実性の世界であるという依他起を中心とした世界転換の原理をその根拠に置き、それを根拠にして修行道に向ったのである。

そこで、大乘の菩薩としての円成実性の世界を目ざして修道する瑜伽唯識論者達には、転識得智への五段階の修習(資糧位・加行位・通達位・修習位・究竟位)によって、能所の分別有執が寂滅したことの上に顕われる無分別智とそれと対面して清浄世間智とが顕わになるが、ここでいう清浄世間智とは、世間を超えた無なる般若波羅蜜多の智慧としての無分別智を根本としてあらわれ出ているのであるから、有執に捉えられることなく常に無な

る般若へのひるかえりを持ち、有執なる煩惱を寂滅して世間を淨化していく清浄なる世間智をいうのである。即ち、彼らは『大乘莊嚴經論』緣起品第一に、

「義智作諸義、言句皆無垢。救済苦衆生、慈悲為性故。巧説方便法、所謂最上乘、為発大心者、略以五義現」と

「由衆生無尽故無究竟。無究竟故不住涅槃」と説いているように、智慧あるが故に迷いの生死に住せず(根本無

分別智の働きの)、大悲あるが故に涅槃に住せず(清浄世間智の働きの)という立場に立ち、煩惱迷妄の有執を捨て難

れ、また空性に停滞しようとする小乗の智慧を否定して、一切衆生の世間を清浄化しようとする無住処涅槃の世間をめぐしたのである。そしてこうした当然の帰結として顕われたのが報身仏思想(利他身)に外ならなかったのである。

この仏身および仏智に関して、『大乘莊嚴經論』は、

「次説諸仏法界清淨。二障已永除、法如得清淨、諸仏及緣智、自在亦無尽」と

「一切種如智、修清浄法界因、利樂化衆生、此果亦無尽」と

「謂起身業口業心業、一切時教化衆生故、(中略)論具足二門二聚為方便故」と

「次説諸仏三身(中略)一切諸仏有三種身一者自性身、由転依相故。二者食身、由於大集衆中作法食故。三者化

身、由作所化衆生利益故。此中応知、自性身為食身化身依止、由是本故」と

「応知受用身復是化身因」と

「由化身諸仏於一切時化作無量差別(中略)食身以自利成就為相。化身以他利成就為相。如此二利一切種成就故」と

「復次化身者。於一切時教化衆生、或現工巧、或現出生、或現得菩提、或現般涅槃、如是種々示大方便、皆令衆

生而得解脫。此是他利成就相」と

「応知此三身撰一切諸仏身。示現一切自利他利依止故」と

と

「一切諸仏有四种智(中略)彼鏡智以不動為相。恒為余三智之所依止。(中略)轉第八識得鏡智、轉第七識得平等智、轉第六識得觀智、轉前五識得作事智」と

「此偈顯示平等智用(中略)諸仏如来於一切時隨逐衆生、何以故、大慈大悲無斷絕故。(中略)如是一切此前二智即是法身」と

「觀智於所識一切境界恒無障礙、譬如大藏与一切陀羅尼門一切三昧門而為依止。」  
「此觀智即是食身」と

「此作事智即是化身」として、

(a) 三身説―自性身・食身・化身。(b) 轉識得智の内容―四智。(c) 三身と四智との対比とを説いているが、これらの思想を総合して見ると、まず法身とは清淨法界(智)、真如そのままにして、大智藏・因・依・無分別智を顕わす大円鏡智(自利)と清淨世間智を顕わす平等性智(利他)の二智としての自性身に代表せられ、さらにその自性身の具体化された姿として食身(無分別智||自利)と化身(清淨世間智||利他)とが顕われている。

即ち、この論は仏身を自利(無分別智)と利他(清淨世間智)との二面に分けて考えている。いわば、自利の面を現わしている大円鏡智(転八識)と妙觀察智(転六識)とを無分別智に置き、利他の面を現わしている平等性智(転七識)と成所作智(転前五識)とを清淨世間智の面に置いて考えている。即ち、大円鏡智と平等性智は法身としての自性身(自利・利他)の智であり、この自性身の具体化された智としての妙觀察智と成所作智は、各々食身(自利)と化身(利他)の智であると考えている。

つまり、大乘菩薩として円成実性の世界を目ざした瑜伽唯識論者達においては、能所の分別有執が寂滅したことの上に顕われる無分別智の獲得は勿論のことであったが、その無分別智の熟されることによって得られる清淨世間智こそ、彼らの最後の目的地であったに違いはない。従ってこのような衆生世間を淨化しようとする誓願が自性身・食身・化身という三身の仏身論を生み出したのであろう。

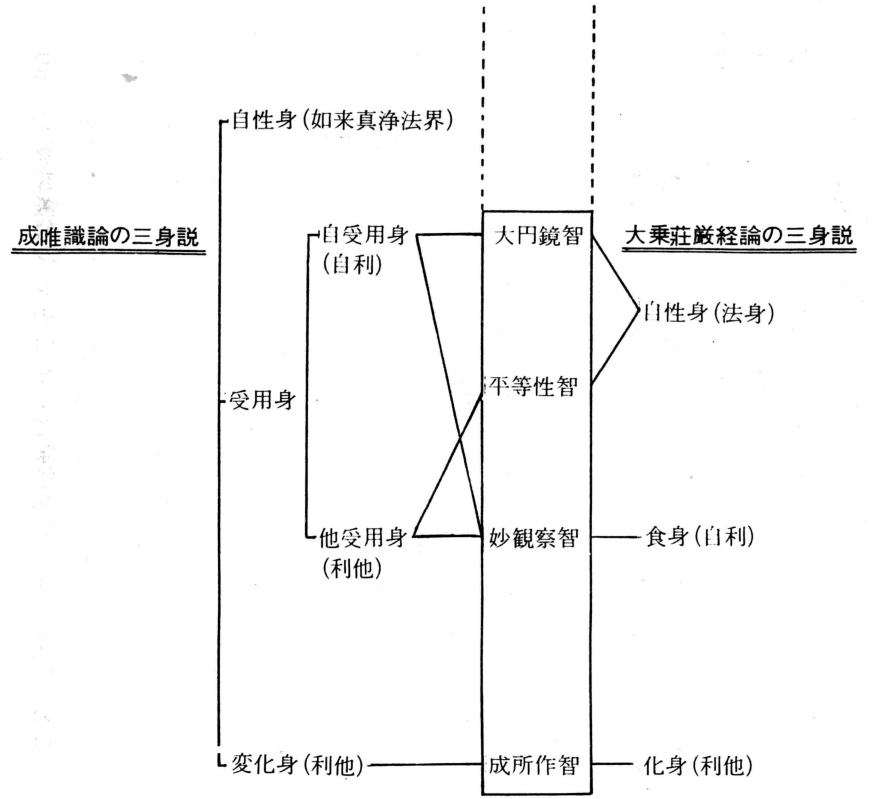
### (三) 『大乘莊嚴經論』を中心とする『宝性論』と『成唯識論』との対比

『大乘莊嚴經論』と同じく、如来藏思想史の第二期の論書として知られている『宝性論』にも法身・色身(受用身)・化身との三身を立てているが、唯だ『大乘莊嚴經論』は求道者が発心して菩薩道に入り、種々なる修行の階梯を経て究竟智に至るという向上的方向を力説する瑜伽行唯識派の立場であるので、成所作智の清淨世間智を生み出す依り所としての妙觀察智の獲得即ち、食身に三身の中心が置かれたのに対して、『宝性論』は衆生の内に内在する如来性が現成し、如来法身として現わになり、その完成された如来(法身)が大悲をもって受用身・變化身を示現するという向下的方向を重視する如来藏思想の立場であるので、受用身と變化身の所依としての如来法身に三身の中心が置かれているようである。

また、三身と四智に対する『大乘莊嚴經論』と『成唯識論』の立場を見ると、図一のように、『成唯識論』は法身を自性身・受用身・變化身との三相に、さらに受用身を自受用身と他受用身に分けて、実在には四身論の立場に立っているようである。そして自受用身、他受用身、變化身に四智をあてはめ、自性身は如来眞淨法界としてのみ認めて智としては何も説明されていない。従って、「自性身は食身と化身の所依である」と説く『大乘莊嚴經論』の説もあって、この二つの論を定理して見ると、密教で言う(法界体性智)は『成唯識論』の自成身の智にあてはめることが出来、ここに密教の五仏五智説の根拠が生まれて来るのである。

以上、初期唯識論書といわれる『大乘莊嚴經論』を中心として、竜樹↓無着↓世親に至る仏身論の展開と、さらに完成された唯識論書の『成唯識論』と如来藏論書の『宝性論』との仏身論の比較、そして密教の五智五仏思想の根拠までも探って見たが、その結果つぎのような事実を明らかにすることができた。

即ち、(一) 竜樹の教学においては、法身の般若波羅蜜多の空性勝義諦が世間的実用の世俗諦として展開し、その四聖諦という世俗諦の修行によってわれわれが空性眞如に悟入するという形態を持ち、そういう過程から色身と法身との二身説が生じて来たのである。



(図 1)

《四智を中心として見た『成唯識論』と『大乘莊嚴經論』の仏身説》

他方、瑜伽唯識派の教学においては、瑜伽行の修習による転識得智の過程を経て円成実性の仏智を得て衆生救済をめざしていくという、いわば無分別智と清浄世間智との自利と利他の獲得という形態を持ち、そういう過程から自性身・食身・化身という三身説が生じて来たのである。

(二) 如来蔵思想史の第二期の論書として知られている『大乘莊嚴經論』と『宝性論』とを比較して見ると、『大乘莊嚴經論』は向上的方向を力説する瑜伽行唯識派の立場であるので成所作智の清浄世間智を生み出す依り所としての妙觀察智の獲得、即ち、食身に三身の中心が置かれているのに対して、『宝性論』は向下的方向を力説する如来蔵思想の立場であるので受用身と變化身の所依としての如来(法身)に三身の中心が置かれている。

(三) 『大乘莊嚴經論』と『成唯識論』との二論をまとめて見る時、密教で言う法界体性智は自性身の智として顕われる十分な根拠が見られる。従って、このような唯識の四智四仏から五智五仏の密教的転換があったことをうら付けることが出来るのである。

かくして、われらは仏身論の展開過程における『大乘莊嚴經論』の位置を新たためて重視し、二身論から三身論へ、さらに唯識から密教への展開の必然性を確かめることができるのである。

(注)

(1) 仏身論に対する研究はすでに多くの学者によって考察されている。

長尾雅人「仏身論をめぐりて」『哲学研究』45の3

山口益・「仏身観の思想的展開」『仏教学セミナー』17、

赤沼智善・「仏教教理の研究」第5章仏身論、

神林隆浄・「四家大乘と純密教思想」『日仏年報』8、

那順政隆・「竜樹の仏身観と法身説法」『仏教研究』第一卷一号、

西尾京雄・「報身仏の歴史的研究」、『大谷学報』11の1、  
 ルーベン・アビト・「大乘莊嚴經論」と「究竟一乘宝  
 性論」の仏身論、『印仏研』26の1、  
 平川彰「仏陀観と心」・大智度論を中心として  
 『仏教学第十号』

上記の論文によれば、經典成立史の順による  
 仏身論の展開はつぎのようである。

經典成立の順による仏身論の展開

『智度論』	法身 (dharma-kāya)	法性生身 (dharma-tā-nir-vṛttā-kāya)	
『大乘莊嚴經論』	法身 (自性身) dharma-kāya (svabhāva- āśraya-kāya)	〔受用身 (自利) 食身 sambhoga-kāya	變 (化) 身 (利他) Nirmāna-kāya
『撰大乘論』	真諦：自性身 (法身) svabhāva-kāya dharma-kāya	応身 (受用身) sambhoga-kāya	變 (化身) nirmāna-kāya
	玄莊：自性身 (法身) svabhāva-kāya dharma-kāya	応身 (受用身) Nisyanda-kāya sambhoga-kāya	變 (化身) nirmāna-kāya
『宝性論』	法身 (自性身) (自利)	受用身 (利他)	變化身 (利他)
『成唯識論』	「法身有三相」として、自性身	受用身〔自受用身 他受用身	變化身
『大乘起信論』	法身 dharma-kāya	報身 vipāka-kāya	応身 Nirmāna-kāya

- (2) 『智度論』・大正蔵 25・348 a、  
 同 大正蔵 25・418 b、  
 (3) 同 大正蔵 25・475 a、  
 (4) 同 大正蔵 25・336 b、  
 (5) 同 大正蔵 25・747 a  
 (6) 長尾雅人・前掲書、山口益・前掲書  
 (7) 『大乘莊嚴經論』・大正蔵 31・606 c、  
 (8) ādarsajñānam acalaṃ trayajñānaṃ tadāśritam/samatāpratyavekṣyām kīṭyānuśīhāna eva ca//67//  
 『Mahāyāna sūtrālamkāra』 p. 46  
 (9) 『解深密經』・大正蔵 16・706 b、  
 『瑜伽師地論』・大正蔵 31・581 c、  
 『仏地經』・大正蔵 16・721 a、  
 『撰大乘論積』・大正蔵 31・438 a、  
 『成唯識論』・大正蔵 31・56 c ~ 57 c、  
 (10) 勝又俊教・「仏教における心識説の研究」287 a ~ 292 a 参考せよ。  
 (11) 武内紹晃・「依他起性をめぐって」『仏教学セミナー』27号・92頁。  
 (12) 『成唯識論』・大正蔵 31・48 b、  
 (13) 『大乘莊嚴經論』・大正蔵 31・590 b、  
 (14) 同 菩提品・65偈 (偈の番号は『国訳一切経』の番号によった)  
 (15) 山口益・前掲書

(16)	同	51	偈
(17)		52	偈
(18)		53	偈
(19)		55	偈
(20)		57	偈
(21)		58	偈
(22)		59	偈
(23)		60	偈
(24)		62	偈
(25)		66	偈
(26)		67	偈
(27)		68	偈
(28)		69	偈
(29)			

I

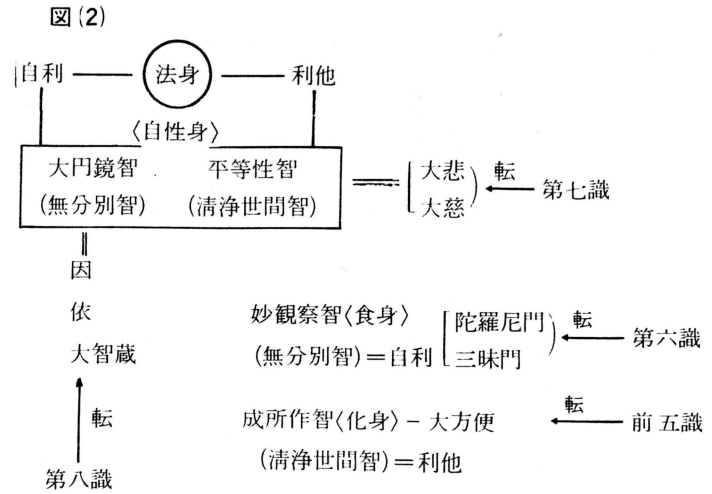
この問題について『成唯識論』と『仏地経論』はかなり細かく論じている。即ち、この二つの論はほとんど同一な立場になって、(a)四智の体(大正31・56 a、大正26・302 a)、(b)四智の所縁(大正31・56 c、大正26・302 c) 303 a)、(c)転識得智の位次(大正31・56 b、大正26・304 a)等を説明している。この説を簡潔に示せば、古来「妙観平等初地分得、大円成事唯仏果起」といって四智の成立過程を説明しているし、また、

- 大円鏡智 [ 無分別智  
無分別智・後得智(○)
- 平等性智 [ 後得智  
無分別智  
無分別智・後得智(○)
- 妙觀察智 - 無分別智・後得智(○)
- 成所作智 [ 無分別智  
後得智(○)

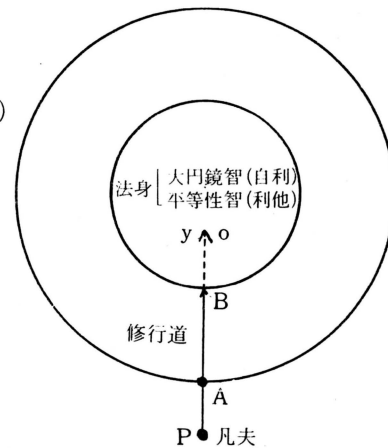
右のように、無分別智と後得智との関係を含んだ四智の所縁を説明しているが、この所は大変むずかしい所であって、本『大乘莊嚴經論』の仏身論の鍵でもある。私は「如是一切此前二智即是法身」という『大乘莊嚴經論』(菩提品66偈)と『成唯識論』の自受用身(大円鏡智)他受用身(平等性智)(大正31・56 c、57 c)との二つの解釈に重点を置き、『大乘莊嚴經論』における仏身と仏智の解釈をしたのである。

従って私の解釈によれば、『大乘莊嚴經論』の仏身論及び四智は二重構造になるのである。(図参照)

『大乘莊嚴經論』における仏身論及び仏智の二重構造 (凡夫の修行道)



図(3)、  
(図2による変化図)



- P : 凡夫の位置
- PA : 陀羅尼門と三昧門による妙観察智の獲得 (自利)
- AB : 大方便の利他行の修習による成所作智の獲得 (利他)
- Bo : 根本 平等の利他行の修習による平等性智と大円鏡智の獲得 (自利・利他)

- いわば、内円は自利の大円鏡智(無分別智)と利他の平等性智(清浄世間智)とを蔵する法身即ち自性身となり、外円は瑜伽修行によって得られる自利の妙観察智(無分別智)と利他の成所作智(清浄世間智)との食身と化身となる。即ち、瑜伽行者は妙観察智(自利)↓成所作智(利他)の修習によって内円の表面に入り、そこにおいてさらに修習して仏の智(四智の獲得)に到るといふ過程をふまなければならないのである。いいかえれば、われら凡夫は陀羅尼門と三昧門との修習によって第六識を転じて無分別智の妙観察智を得、ここではじめて外円の表面に至ることができるのであり、さらに大方便の利他行の修習によって前五識を転じて清浄世間智の成所作智を得、ここではじめて内円の表面に入ることになって、法身取得の資格者となるのである。瑜伽行者はそこでさらに根本平等の利他行の修習によって第七識を転じて平等性智を得、第八識を転じて大円鏡智を得てここではじめて法身となることが出来るのである。従って、『大乘莊嚴經論』の仏身論および仏身と四智との関係は瑜伽行者の修行道にして凡夫が仏となる過程を説明したこと以外ならぬのである。
- つまり、この二重構造こそ色身から法身への竜樹教学を具体化させ、大乘仏教としての利他の面を強調したその根拠となるのであらう。
- (30) 如来蔵と阿頼耶識とを同時に説きつつ未だ両者の関係を明らかに論じない一類の論書を如来蔵思想史の第二期の論書とするが、『大乘莊嚴經論』は『撰大乘論』・『十地經論』・『宝性論』・『仏性論』と共にこの第二期の論書に当たるといわれている。勝又俊教・『仏教における心識説の研究』六一四項。
- (31) 「三種仏身。所謂実仏・受法楽仏・化身仏」(大正蔵 31・842c)
- (32) R・アビト・『大乘莊嚴經論と究竟一乘宝性論の仏身論』(印仏研 26の1)
- (33) 神林隆浄・『四家大乘と純密教思想』(日仏年報 8)、「唯識思想と純密教」(宗教研究・新 13の1)

# 新羅仏敎研究會 會則

## 第一章 總 則

第一条(名称) 本會는 新羅仏敎研究會라 称한다.

第二条(目的) 本會는 會員相互間의 親睦을 圖謀하고 學究生活을 通한 韓國 仏敎中興의 길을 模索하며, 나아가 韓日兩國間의 親善交流에 寄與함을 그 目的으로 한다.

第三条(事業) 本會는 前條의 目的을 달성하기 爲하여 下記의 事業을 施行한다.

- (1) 會員의 相互親睦을 爲한 會合
- (2) 仏敎學에 關한 修士論文 以上の 研究論文(「韓國 仏敎學 Seminar」의 發刊).
- (3) 其他 仏敎文化啓發事業에 寄與하고, 韓日文化親善에 도움이 되는 學術的 事業.

第四条(事務所) 本會는 事務所를 會長의 住所地에 둔다.

## 第二章 會 員

第五条(會員) 本會의 會員은 正會員과 名譽會員 그리고 特別會員으로 構成한다.

- (1) 正會員은 日本國內의 各 大學, 大學院 및 研究機關에 在籍하는 仏敎學徒로서, 仏敎學 및 仏敎學關係學을 專攻하며 大韓民國의 國是를 遵守하는 者.
- (2) 名譽會員은  
가. 正會員中 歸國한 者.  
나. 日本에서 留學을 마친 仏敎學 및 仏敎關係學을 專攻한 者로서 歸國한 者.
- (3) 特別會員은 本會의 趣旨에 贊同하여 財政的 贊助를 하는 者.

第六條(入會) 本會의 會員이 되고저 하는 者는 正會員 2人의 추천을 얻어

- 雲虛電河著「仏敎辭典」東國大學 訳經院刊、五九九頁 参照。
- (30) 赫連挺「均如伝」第六「感通神異分」条(金知見編「均如全書」下卷 六〇五頁 前註(30)に同じ。
  - (31) 前註(30)に同じ。
  - (32) 前註(30)に同じ(「均如全書」六〇六頁)
  - (33) 赫連挺「均如伝」第九「感心降魔分」条(金知見「前謁書」六一七頁)
  - (34) 河文綱「豪族と王權」(「韓國史」四号 一三三頁)参照。一九七四年 國史編集委員會編。
  - (35) 赫連挺「均如伝」第八「訳歌現徳分」条(金知見編「均如全書」下卷 六一六、六一七頁)参照。
  - (36) 李内壽著「新修韓國史大觀」一九三頁。普門閣刊 一九六四年。